



ネパール・ミカノ会

No. 7号 1999・1・3発行

〒194-0213 東京都町田市常盤町 3196

世羅美庵内ネパール・ミカノ会 ☎ 0427-98-0046

迎 春

ネパール・ミカノ会
会長 斎藤 謙也

新しい年を迎え、会員の皆様、益々ご健祥の事とお喜び申し上げます。さて、平成10年度は、ミカノ会にとって画期的な年となりました。活動も軌道に乗り、ネパールに向けての、又国内に向けての会員各位の頑張りが、そのまま「てごたえ」となってかえってきたように思われます。この勢いが平成11年につながっていけば、と思っています。

私は平成10年11月29日より一週間カトマンドゥとルンビニに行ってきました。目的は、世界仏教徒会議の出席とルンビニ地区学校建設状況（マホマディア小、シリ・マズワニ小）の調査及び近隣小学校の視察（3校）を兼ねて行ってきました。ルンビニ地区だけでもかなり、多くの要望があり、やるべき仕事はたくさんあります。そして細々とでも、支援をはじめたら途中でやめないで継続する事も大切だと思います。奨学金も、女性の就学率を高める為も含めて、必要な事と思われれます。「ゆっくり」と、しかし着実に一步一步進めていきましょう。この時期大変よい季節で、ヒマラヤがよくみえました。3月3日からの第二次教育支援の旅を成功させながら、仲よくやっ行っていきましょう。

（追記、H10.12.25 会員でもある私の妻と娘が、ネパール大使夫妻主催のパーティーにまねかれました。このような積み重ねが、日常的に多くなる年が、平成11年かと思っています。）



スリー、グルワニ・マイ小学校（ルンビニ地方パラサハワ区ゴナハ村）

「本年もよろしく」

昨年は体調の関係で、個人的にあまり協力ができませんでした。ミカの会の活動は会長、事務局長他多くの会員によって着実な活動をしてきたようです。

昨年一年間、世間では暗い話題が多かったようですが、ミカの会の活動を見ると、やはり世の中、善意の人のほうがずっとずっと多い気がします。

私はミカの会で、ネパールという国に身近に接し、日本に住んでいる自分を考えると、気がつかない多くのことを教えられました。多くの人がネパールの人たちとの交流によって、日本で失われそうになっている良い面をとりもどせたらと思っています。

副会長 高原 担

1999年新春を迎え

ネパール・ミカの会は発足以来順調にいや予想を超えて成長してまいりました。斉藤会長はじめ会員の皆様の情熱、熱意の賜物と思います。昨年はネパール視察の旅、国際ボランティア祭さくら祭りなどの事業、郵政省ボランティア預金の獲得、町田国際協会の発足と大きな足跡を残しました。

特に多くのボランティア団体との交流が図れたことは今後の事業展開に大きな力を発揮する事と思います。

本来の目的であるネパール支援も順調に進み本年も視察、交流の旅が企画されています。是非参加され直接ネパールの文化、自然に触れ、こども達に支援と愛情の触れ合いを期待します。

どんな組織も成長をしてくると会員相互のコミュニケーションが不足し、グループ化し、全員共通の話題、意識が持ちにくくなります。事務局の負担も増加します。ミカの会がよりいっそう成長、充実していくためには事務の分担、資料の整理、事業資金の確保、広報活動、会員の拡大、国内外のボランティアの情報収集などが必要で本年こそ充実の絶好のチャンスと思います。組織の維持は大事なことです。ボランティア事業をスムーズにパワフルに展開するために必要なもので、そのためだけに力をうばわれ事業が進まないようになってはまさに本末転倒です。

私ごとですが本年も第3回チャリティーボウリング大会を開催予定です。ご協力をお願いします。皆様にとって最高の一年でありますように。

副会長 加藤 誠一

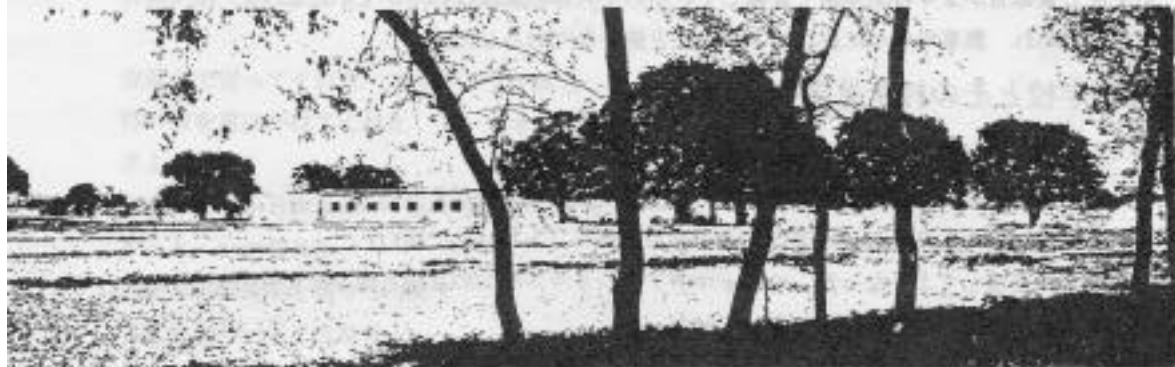


ネパール世界仏教徒サミット参加ならびに現地視察調査旅行

1998年12月

シリ・マズワ＝小学校

山下 繁憲 記



ネパール カトマンズに来て、古きよき町 バタンを一日見学し、ブッタサミット用の臨時便で空路、バイラワ入りした。ホテルから、夜リクシャーに乗って、レストランに食事に行く。町の中は、とても暗く道路には牛、犬、山羊、豚、人間が皆いっしょに生活している。町は文明とはかけ離れて時間が止まっているようだった。三泊するホテル サンタヌにてシャワーのお湯が出ないというハプニングがあった。係の人に見てもらったが復旧せず、以後三日間まったくダメであった。

ルンビニでブッタサミットに参加する。

第一日目の平和の行進に参加 首相 文化宗教大臣を先頭に平和の行進である。民族衣装を着けた女性、古いお面を付け踊る人、旗、横断幕を持つ人、女の人は大半が裸足で歩いていた。

ラマ君に色々説明してもらい、中でも感動したのは、色んな人に出会えた事だった、世界で最初にエベレスト&カンチェンジェンガに登頂した女性であるミニシルバさんを紹介していただき、一緒に写真を撮らせてもらった上名刺までいただいた。

又 エベレストに最短時間22時間で登った男性 ガンジーシルバさんにも会えた、ラマ君の隣村の人で、友達という事だそうです。

ブッタサミットの会場は、暑い中 長いスピーチが延々と続く、自分達はテントの中で多少暑さは変わるが、一般の人達は暑い中で何十万人という人が、暑さの中 スピーチに聞き入っていた。

ルンビニの町、ネパールの大イベントなのだろう、会場は人で埋めつくされていた。

2日目、朝からスケジュールが遅れるがネパールでは日常な事なのであろう、午後サミットが終わってから 各国及び、ネパール国内から招待された人達とテイラウラコットのカピラバウストウの遺跡を4ヶ所 警察官の護衛付バスで見学した。帰り道、18時頃にバスが突然故障でストップした どうやら直りそうにない。

バスを降り、ふと空を見上げると とても綺麗な満月であったのがせめてもの救いであった、警察官が無線で救援を要請し 待つこと30分、なんと護送車が迎えに来てくれた、ぎゅうぎゅうに詰め込まれ 猛スピードで走る 道が悪いのでとても揺れ 気分が悪くなりそうだった。

ホテルに着くとラマ君が心配そうに待っていた。

ホテルも警察官が24時間体制で警備しているので大体の状況はわかっていたようだった 何はともあれ 無事ホテルに戻れてよかったと胸をなでおろした。

支援学校とその村を見学

第一印象は、どの学校もとても粗末な物であった

古い机、古い椅子があったが まだあるだけでも ましな学校だそうだ

先生方の休む所もちろん 水道はおろか井戸も無く、トイレまで無い。

ミカの会で支援してよくなった マフォマデア、シリマズワンの2校と他3校を見学した、どの学校も子供達がたくさんあつまっていた。

2人か3人の先生が300人から400人の子供に勉強を教えているらしい

とても感銘を受けた、がんばってくださいと願わずにはいられなかった。

村長さんが村の中を案内してくれました。

村はどの家も中は暗く とても貧困な様子であった。

土間のような居間 わらのベッド ろうそく明かりの中で、人、牛、犬、鶏、山羊、豚、皆一緒に生活をしている様でした。

それでも子供達の日がとても綺麗でかわいかったのが印象的だった。

ナガールコットの丘とマウンテンフライト

カトマンズに着いた時、ナガールコット行とマウンテンフライトをお願いしておいたら すべてOKとの事、とても楽しみだったので非常にうれしかった、よい事は続くもので、

その日 ラマ君の妹に会った、すてきな人で、19歳の医学部の大学2年生との事 一目で私は気に入ってしまった、勝手ながら友達になってもらう事とした。

彼女の名前は ジャンモ ラマさんと言った

斎藤会長さんが、その妹さんも招待しようという事になり、6名でチャーターした車で ナガールコットの丘に向けて いざ出発！

丘の上は天気もよく、夜景も綺麗で その上ホテルがとてもすばらしかった。

なにがすばらしいって、そのホテルのベッドには湯たんぼがあるではないか！

心憎いばかりの気遣いだ、ナガールコットンホテル、ザ、フォート万歳！3重〇だ！

いよいよ今日はマウンテンフライトの日だ、

天気もいいし、気分は最高！

出発は少し遅れて12時30分、まもなく窓越しにヒマラヤの山々が迫ってきた。

とても大きく、すばらしい一言だ！

さらにヒマラヤの最高峰 エベレストのまん前で なんとロックビットに案内してくれた

とてもすばらしい！目に焼き付けておこう、山の向こうにチベットが見えた、

帰り際、高度がだんだん下がってくると、山並みだけでなく、山の間湖や段々畑が見え、菜の花、山桜も咲いていた、とてもすてきなフライトだった。

その日の夕方、チベット料理のレストランにて お別れ会を行った、ジャンモさんも持っていてくれた、今日が最終日と言う事で、皆といろいろ話をしたかったのだが、緊張と寂しさからか言葉が出てこなかった、やはり別れは辛いものだ、

空港まで送ってくれた ヌルブ ラマ君と
白い布を首にかけてくれた ジャンモ ラマさん
さようなら
また いつか日本かネパールで会いましょう
きっと いつの日か、
何回も何回も手を振りつけて
さようなら…さようなら……

斎藤会長の発案で、ジャンモ ラマさんを日本に招待する事になった、旅行中にラマ君の通訳で日本に行けたら何処に行きたいかたずねたら、「まず日本の海が見たいそしてつぎにディズニーランド、電車やバスにも乗ってみたい」との事だった、日本に来て色々な物を見て行けば 人生のいい勉強となるはずだ、斎藤会長 ありがとうございます、必ず実現させましょう。



参加者10万人 世界仏教徒サミット



シリ・マズワニ小学校



マズワニ村家訪問

童話

ヒスイの杯 さかずき



佐藤 文則

夕方、健太がロッジの外で、サガルマータ（エベレスト）をぼんやりながめていたら、白い象が一頭来て、「健太くん、乗らないか」と言った。

健太は、ネパールを応援しているグループに、お母さんといっしょに加わって、旅行に来ていた。

きょうは、小学校で鉛筆やノートを配った。健太と同じ年ごろの子どもたちは、貧しくて文房具を買えないのだという。子どもたちはとびきりの笑顔で、うれしさを表わした。贈り物のボールで、サッカーを知らない子どもたちと、めちゃくちゃなゲームをして楽しんだこともいい思い出だ。「知恵の輪」もひっぱりだこだった。

象の背につかまって、しばらく行くと平原に出た。平原の中ほどに、四方にゆったりと枝を伸ばした大きな樹があった。象が立ち止まり、健太を降ろした。すると、樹の中からすーっと女の人が現れたのにはびっくり。黄色の薄い衣をまとったその人は、お母さんより十倍もきれいだった。

女の人が胸の前で両手を合わせて、言った。

「ナマステ（こんばんは）、日本の子よ、ようこそおいで下さいました」

そして健太の首に、マリーゴールドのレイをかけてくれた。

「ナマステ、ダンニェバード（ありがとうございます）」

健太もまねをして両手を合わせ、おぼえたばかりのネパール語で、お礼を言った。

「日本の子よ、あなたはネパールの子どもたちに、愛と活力を与えてくれました」

女の人がそう言ったので、健太はあわてて首を横に振った。

「いいえ、ボク、お母さんに付いてきただけなんです。ボクはネパールの子どもたちから、物を大切にすることを教えられました」

「お互いにすばらしいことです。私はあなたに、何かしてあげたいのです。何をお望みですか」

健太は考えた。いっしょに来るはずだった友だちのはるかちゃんが、風邪をひいて日本で寝こんでいる。

「はるかちゃんをネパールに連れて来られませんか」

健太は、お願いしてみた。

女の人はいっぺりうなずいて、右手を差し出した。手のひらに、小さなヒスイの杯があった。健太が受け取ると、女の人がたもとから、これもヒスイのびんを取り出し、何かの液を健太の杯にそそいだ。

「その杯を月にかざしてから、半分飲みなさい。残りの半分は、はるかちゃんの分ですよ」

健太がヒスイの杯を月にかざすと、月からひとすじの光が、ピカーッと杯に届いた。

杯の液を口に入れると、グレープジュースみたいな甘ずっぱい味が、口の中いっぱい広がる。ごくくと飲みこんだら、健太の体が、ふわっと宙に浮いた。

健太は空を飛んで、日本へ向かう。あっという間に、はるかちゃんのベッドのそばに立っていた。ゆさぶって起こし、ヒスイの杯を渡した。

「お月さまにかざしてから、それを飲んでみて」

はるかちゃんも浮いた。ふたりで空を飛んで、ネパールへもどる。ふたりは白い象に乗っていた。平原の空気を吸い、川の匂いを感じ、森のエネルギーを浴び、山の靈気に触れ、ネパールという国を心にいっぱい詰めこんだ。そして、神々の座といわれる山々が、遠くに青白く連なっているのを、ふたりはしっかりと頭にきざんだ。

ロッジにもどると、大人たちが心配して健太を探していた。ほっとした表情から、鬼よりもこわい顔に変わったお母さん。床に入ってから、全部話して教えたのだが、

「その辺で、夢でも見てたんでしょ」
と、お母さんは相手にしてくれなかった。

(本当は夢だったのかなぁ…)

さっき胸のポケットを見たら、たしかにマリーゴールドの花びらが、ひとひら入っていたのだけれど。

日本へ帰って、はるかちゃんに会ったら、

「健太くん、これもらっていいの」

と言って、ヒスイの杯を出した。

(やっぱり、夢ではなく本当だったのだ)

どうせ大人たちは信用しないだろうから、だまっていよう、と健太は考えた。

「うん、ネパールの女の人があげるって。でもないしょだよ」

はるかちゃんが、こくんとうなずいた。

—おわり—

第三回

ネパール教育支援旅行団募集



日 時	・3月3日(水)～10日(水)	*13日(水)日
費 用	・約20万円(昼食・飲み物代は別)	*23万円
定 員	・約15名	
行程(予定)	・羽田発(3日)→カトマンドゥ(4日)→ポカラ(5日)・(5・6日)→ タンセン(6・7日)→ルンビニ(8日)→カトマンドゥ(9・10日) →チトワン(9日)→カトマンドゥ(10日) →ルンビニ(9・10日)→チトワン(11日)→カトマンドゥ(12・13日)	

*1月末日で締切りと致します。参加ご希望の方は事務局まで

夢の下書

会長の手帳から抜き書きした昨年のミカの会の活動を掲載する予定が、あまりに多すぎて取りやめる事にしました。(必要の方は事務局まで)
よくぞこれだけ活動できたものと(下世話に言えば一銭にもならない事に)今さら驚いています。多くのNGO団体が資金難に苦しんでいる昨今。大不況下にうぶ声をあげたおかげか、支援活動が広がるばかりです。大きくなると(これから)大変ですよ。他団体や、郵政省の方から御忠告もいただきました。身にしみるお言葉ですが、なにはともあれウサギ年。無理せず、昼寝せずに、このまま流れにそってジャンプできればと思っています。(坂)